

第3章 京都大学病院構内A F14区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の経過

本調査区は、病院構内の西部に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1-339地点）。ここに、総合研究棟（医学部保健学科、現・医学部健康科学科）改修その他工事とともに、建物の新設などが計画されたため、周辺地点における従来の調査を勘案して、発掘調査を実施した。調査期間は、2007年7月30日から9月28日。3カ所に分かれた調査区の総面積は712.6㎡。出土遺物は縄文時代から近代に及び、整理箱43箱を数えた。

調査区周辺の過去の調査では、19地点で古代末の護岸跡、19・39・122地点で中世の井戸・溝や近世の柵列・野壺・方形土坑群、200a地点で中世の土坑・集石、200b地点で近世の道路・井戸・野壺などが見ついている。このような従来の調査成果から、今回の調査では、古代から中世・近世にいたるこの地一帯の土地利用の変遷を明らかにすることにとくに留意しつつ調査を進めた。

調査地点が3地点に分散していたため、便宜上、東調査区（213.7㎡）、北調査区（335.7㎡）、西調査区（163.2㎡）と呼称して調査を進めた（図34）。調査の結果、東調査区は中世の遺物包含層が厚く、狭小な面積にもかかわらず、整理箱17箱に及ぶ中世の遺物と井戸や溝などが見つかった。北調査区は、中世の道路状遺構・溝・土坑を検出したが、遺構密度は高くなく出土遺物も溝や道路状遺構から比較的多くの遺物が出土したが、全体的な出土量としては多くなかった。2筋検出した道路状遺構は、いずれも北東から南西への道筋をとっており、調査区南西辺では重複していた。当初、調査区西よりをはしっていた旧道を東側へ付け替えた可能性が高い。野壺や柵列などの近世遺構の分布から、近世においても北東から南西へ向かう道路の存在が復原でき、中世以来、この地が道路あるいは土地境界としての機能を維持していたことが推定できた。西調査区では、中世段階では砂礫の堆積する不安定な状況にあり、近世にはいって安定し、耕作地として利用されていた。

以上のように、中世段階では東調査区を含む一帯が人間活動の中心地で、西調査区付近は高野川系流路の影響下にある不安定な状況で人間活動が及ばなかったこと、北調査区付近には北東から南西へ道路がはしり土地利用の境界をなしていたこと、近世では調査区一帯が耕地として利用されていたことが明らかとなった。

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

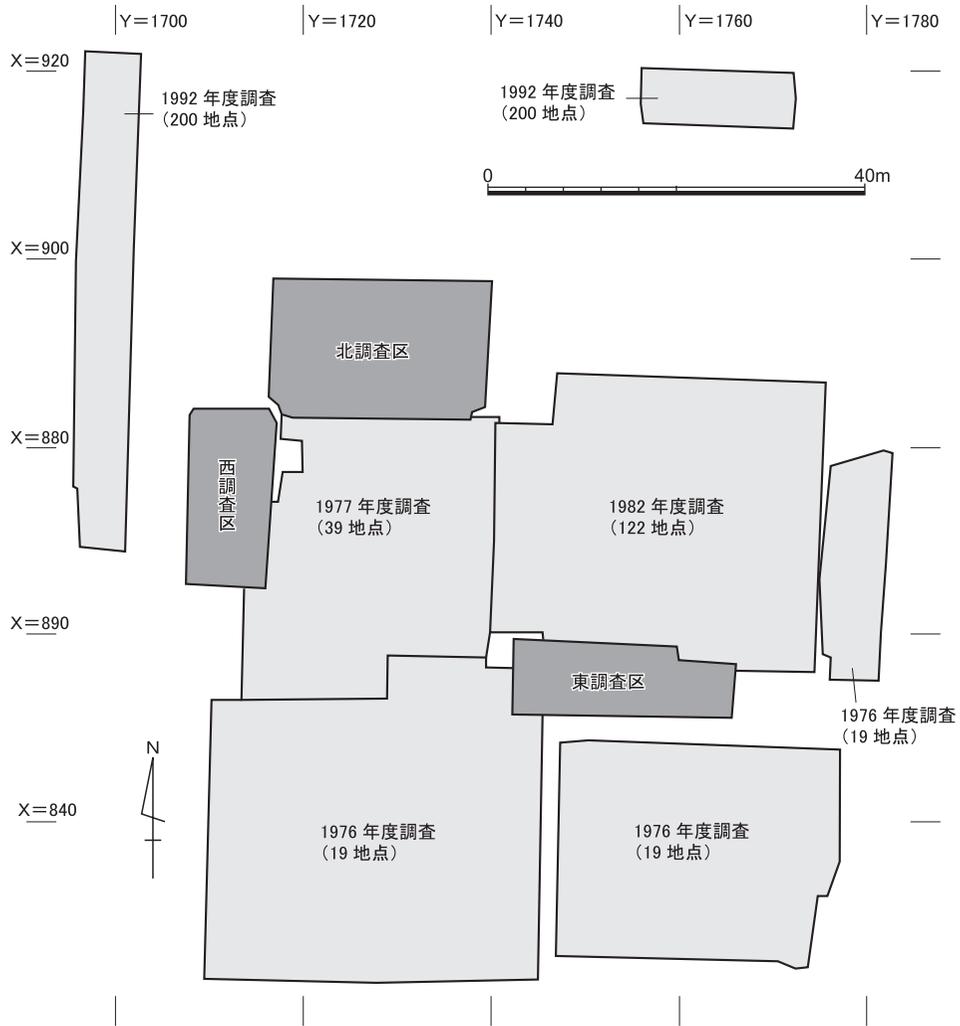


図34 調査区的位置 縮尺1/800

2 東調査区の発掘成果

(1) 層位 (図35)

調査区北壁の層位を図35に掲げる。基本的な堆積は上から順に、表土・攪乱 (第1層), 黒褐色土 (第2層), 茶褐色土 (第3層), 灰褐色土 (第4層), 砂礫 (第5層) となる。

第2層の黒褐色土は層厚40cm前後の近世畑作土で、近世後半の遺物を包含する。第3層

東調査区の発掘成果

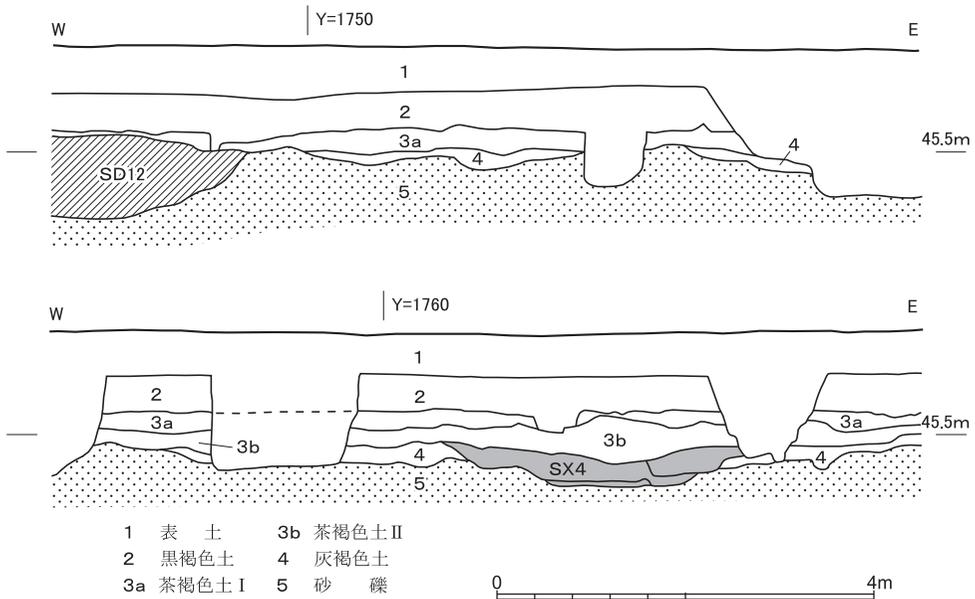


図35 東調査区北壁の層位 縮尺1/80

は中世の遺物を包含し、拳大の礫を含む3 a層とやや粘質で3 a層より明るい3 b層に細分できる。第4層の灰褐色土は第5層の上面が土壌化した堆積物であろう。遺物を含まない。第5層の砂礫は上部10cm前後は黒褐色で土壌を含み、それ以下は赤褐色を呈する。高野川系の堆積物であろう。

(2) 検出遺構 (図版8・10, 図36)

第4層の灰褐色土上面で中世の遺構、第3層の茶褐色土上面で近世の遺構を検出した。

中世の遺構 井戸・溝・集石・土坑・野壺などがある。SE7・SK10は井戸。ともに素掘り井戸で、SK10は下底面に周囲を小礫で囲んだ水溜が認められた。SE7も底面近くで小児頭大の礫がいくつか出土したが、並びを確認することはできなかった。下底面の標高は、SE7、SK10ともに44.74mである。

SD13・14は南北方向、SD10~12は東西方向に伸びる溝である。SD13・14は約1.8mの間隔をあけて平行にはしる。東西方向の溝のうち、近接してはしるSD11・12は調査区内で東端が確認できた。調査区北西隅のSD10は北へ伸びる溝がとりついている。

調査区東辺のSX2~4は集石遺構。いずれも拳大から小児頭大の礫が集中していて、明瞭な掘形がみられなかった。このうち、SX4は規模が大きく東西4.5m、南北は5m以上となる。西側が高く東側へ下る斜面に礫が密集しており、遺構検出の過程および礫のあ

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

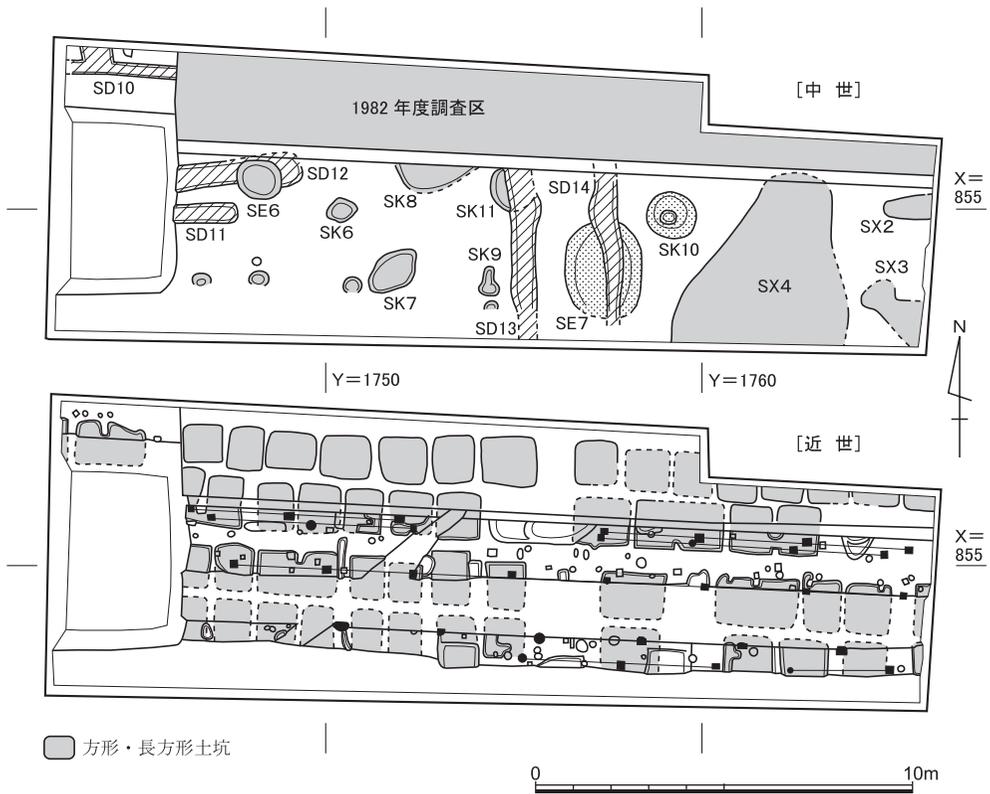


図36 東調査区検出の遺構 縮尺1/200

いだから、土師器を中心とした多量の遺物が見つかった。

SE6は茶褐色土を掘削中に検出した遺構で、灰褐色土を埋土とする。長径1.2m、短径1mの平面楕円形。検出層位からみて、中世後半ないしは近世前半の野壺であろう。

近世の遺構 方形・長方形土坑群および柱穴がある。柱穴は、一辺20cm前後の方形の掘形で、2.6～2.8mの間隔で東西方向に並ぶ。耕作に伴う柵列であろう。

方形・長方形土坑群は、この柱穴を切って構築されており、年代的に柵列よりも新しい。一辺1～2m前後で、方形ないしは長方形を呈し、検出面からの深さ2～3cmときわめて浅い土坑である。南北2個で一組となって東西方向に並んでいる。長方形の土坑には、長辺の中央で辺側から切れ込みが入り、2つの土坑が連結されているように見えるものもある。京都大学の構内では、本調査区周辺すなわち病院西構内でのみ見つかった。遺構の切り合いなどから判断して、幕末以降、大学病院設置以前の遺構と考えられるが、具体的な用途の解明には至っていない。

東調査区の発掘成果

(3) 出土遺物 (図版11, 図37~43)

S X 4 出土遺物 (Ⅲ 1 ~ Ⅲ56) Ⅲ 1 ~ Ⅲ43は土師器皿。橙褐色と灰白色があり, 前者が主体を占める。口径 8 ~ 9 cmのⅢ 1 ~ Ⅲ34, 11cm前後のⅢ35 ~ Ⅲ37, 12~14cmのⅢ38 ~ Ⅲ43に分かれる。1段撫で面取手法のD₅類, 1段撫で素縁手法のD₃類が多い。Ⅲ44 ~ Ⅲ49は土師器受皿。Ⅲ46が橙褐色で, それ以外は灰白色である。Ⅲ50は白磁椀。Ⅲ51は瓦器鍋。Ⅲ52・Ⅲ53は瓦器盤。Ⅲ54は土師器, Ⅲ55は瓦器を転用した加工円盤。法量は, Ⅲ54が径50mm, 重さ35.4g, Ⅲ55が径75mm, 重さ99.2gである。Ⅲ56は軒丸瓦。単弁8葉の蓮華文軒丸瓦。外区に珠文帯をもつ。

S X 4 上層出土遺物 (Ⅲ57 ~ Ⅲ87) S X 4を検出する過程で見つかった遺物。Ⅲ57 ~ Ⅲ80は土師器皿。S X 4出土の土師器皿と様相は類似し, D₃類およびD₅類から構成される。Ⅲ81~84は土師器受皿。Ⅲ85・Ⅲ86は白磁で, Ⅲ85は合子の身, Ⅲ86は椀。Ⅲ87は灰釉系陶器椀。

S E 7 出土遺物 (Ⅲ88 ~ Ⅲ106) Ⅲ88 ~ Ⅲ96は土師器皿。D₃類とD₅類からなる。Ⅲ97は灰白色を呈する土師器椀。Ⅲ98 ~ Ⅲ100は土師器受皿。Ⅲ101は青白磁の椀。見込みに, 篋描きで花文を描く。Ⅲ102 ~ Ⅲ104は白磁。Ⅲ102は見込みに櫛描文をもつ。Ⅲ105は青磁椀。Ⅲ106は複弁の蓮華文軒丸瓦。外区に珠文帯をもつ。

S K 10 出土遺物 (Ⅲ107 ~ Ⅲ119) Ⅲ107 ~ Ⅲ115は土師器皿。口径 8 ~ 9 cmのⅢ107 ~ Ⅲ110はD₃類, 11~12cmのⅢ111 ~ Ⅲ114はD₅類, 口径14.8cmのⅢ115は2段撫で手法のC₃類。Ⅲ116は灰白色の土師器受皿。Ⅲ117・Ⅲ118は灰白色の土師器椀。Ⅲ119は白磁の椀。見込みに圏線をもつ。

S X 3 出土遺物 (Ⅲ120 ~ Ⅲ128) Ⅲ120 ~ Ⅲ127は土師器皿。2段撫で手法のC₃類が主体を占める。Ⅲ121は口縁端部に煤が付着する。Ⅲ128は回転台成形の土師器椀の底部。底面に, 回転糸切り痕を残す。

S X 2 出土遺物 (Ⅲ129 ~ Ⅲ141) Ⅲ129 ~ Ⅲ135は土師器皿。Ⅲ134がC₅類で, そのほかはD₂・D₃類である。Ⅲ136・Ⅲ137は灰白色の土師器椀。Ⅲ138・Ⅲ139は土師器受皿。Ⅲ140は瓦器椀。Ⅲ141は白磁椀。見込みに圏線をもつ。

S K 6 出土遺物 (Ⅲ142・Ⅲ143) 土師器皿。Ⅲ142はD₂類, Ⅲ143はD₅類。

S K 11 出土遺物 (Ⅲ144 ~ Ⅲ146) 土師器皿。D₅類。

S D 11 出土遺物 (Ⅲ147 ~ Ⅲ151) 土師器皿。D₂・D₃類。Ⅲ148は口縁端部に煤が付着する。

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

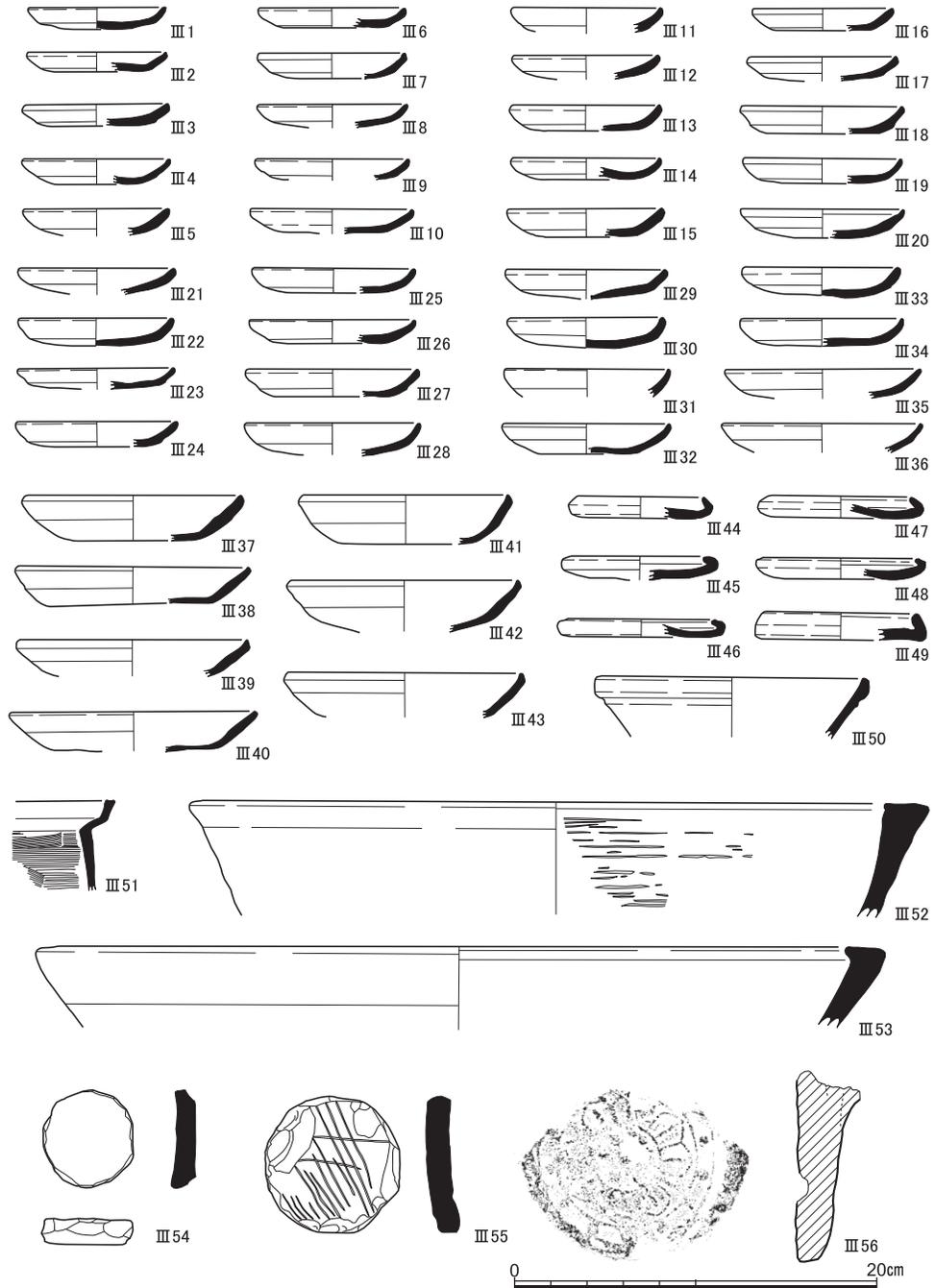


図37 S X 4 出土遺物 (III 1 ~ III 49土師器, III 50白磁, III 51 ~ III 53瓦器, III 54・III 55土製円盤, III 56軒丸瓦)

東調査区の発掘成果

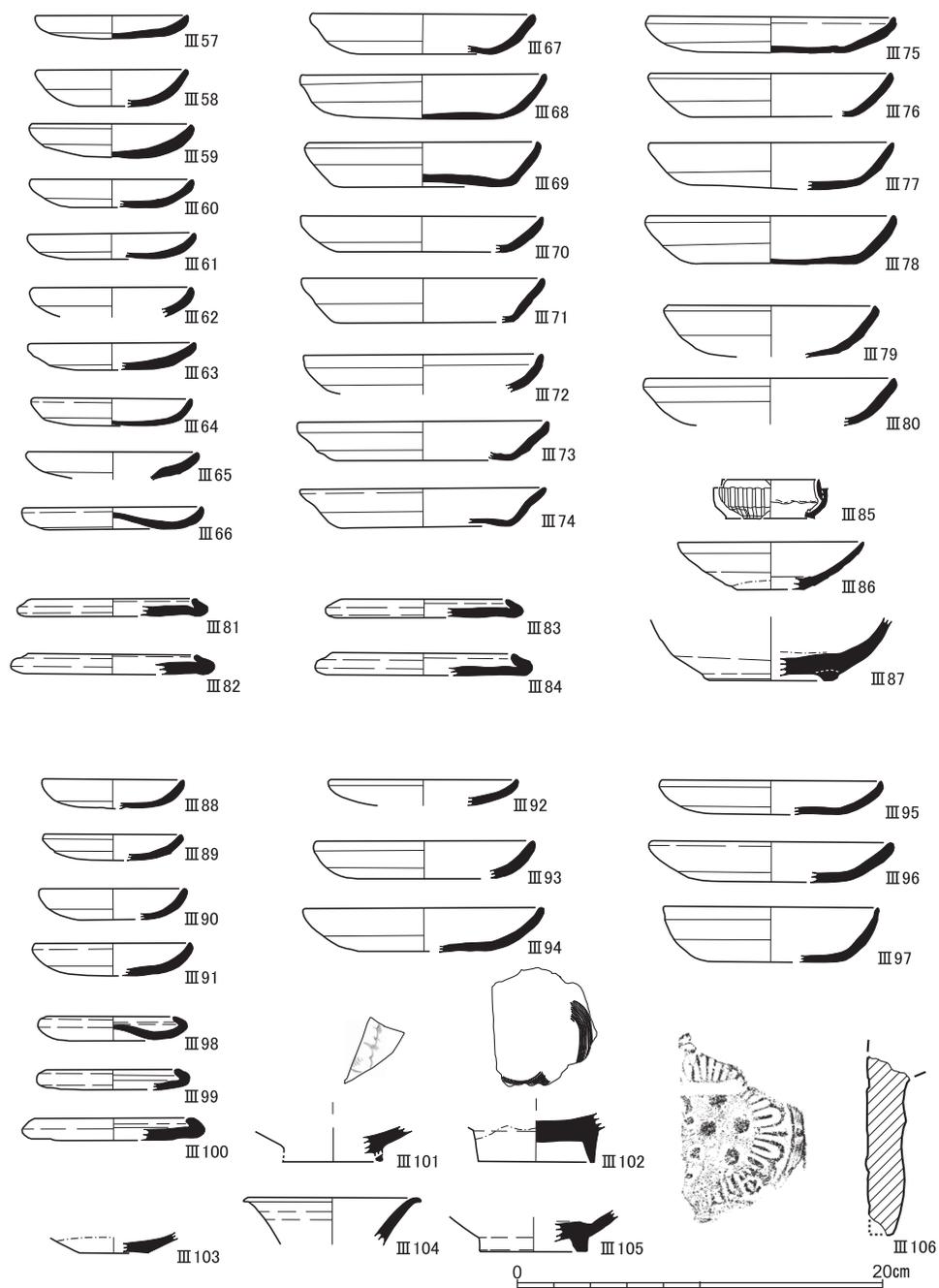


図38 S X 4 上層出土遺物 (III 57~III 84土師器, III 85・III 86白磁, III 87陶器), S E 7 出土遺物 (III 88~III 100土師器, III 101~III 105磁器, III 106軒丸瓦)

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

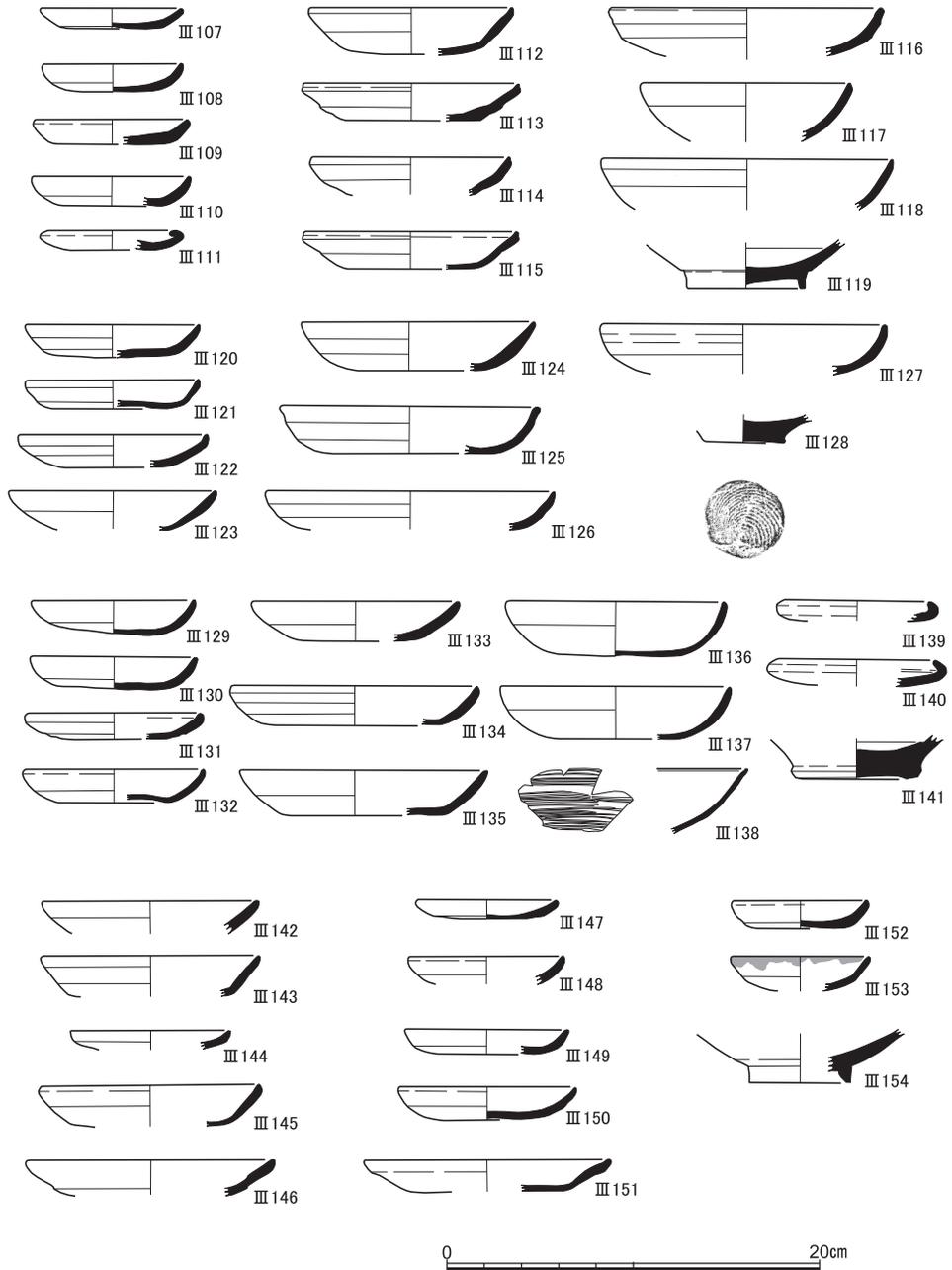


図39 S K 10出土遺物 (Ⅲ107～Ⅲ118土師器, Ⅲ119白磁), S X 3出土遺物 (Ⅲ120～Ⅲ128土師器), S X 2出土遺物 (Ⅲ129～Ⅲ139土師器, Ⅲ140瓦器, Ⅲ141白磁), S K 6出土遺物 (Ⅲ142・Ⅲ143土師器), S K 11出土遺物 (Ⅲ144～Ⅲ146土師器), S D 11出土遺物 (Ⅲ147～Ⅲ151土師器), S K 9出土遺物 (Ⅲ152～Ⅲ154土師器, Ⅲ155白磁)

東調査区の発掘成果

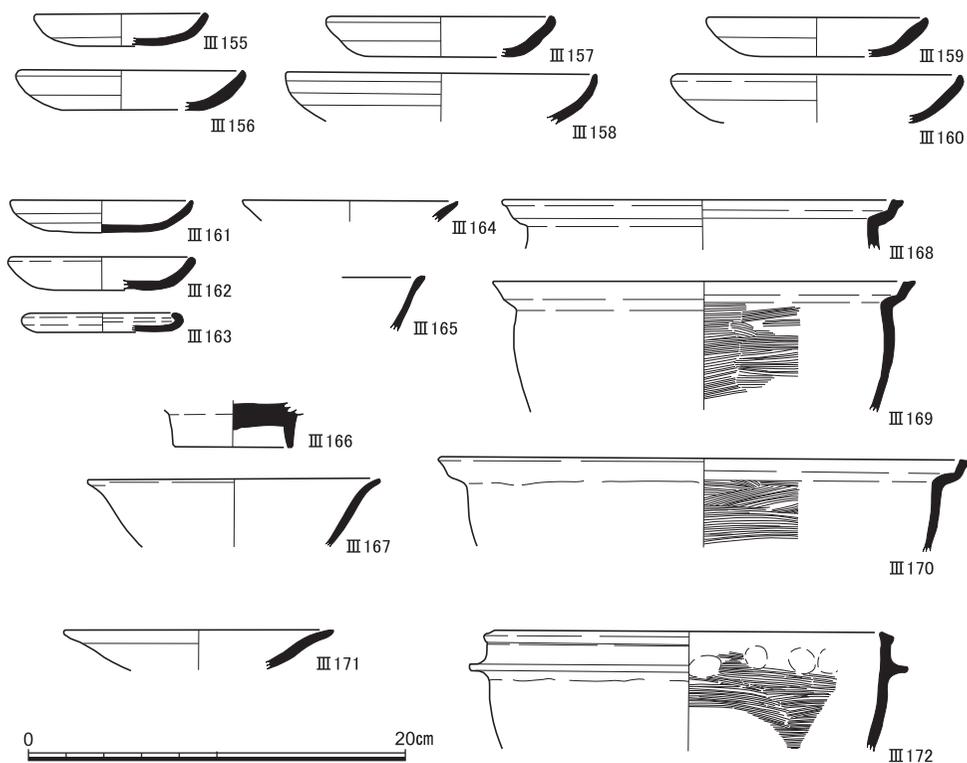


図40 S K 9出土遺物 (Ⅲ156瓦器), S D14出土遺物 (Ⅲ157~Ⅲ160土師器), S D10出土遺物 (Ⅲ161・Ⅲ162土師器), S D12出土遺物 (Ⅲ163~Ⅲ165器, Ⅲ166~Ⅲ169磁器, Ⅲ170~Ⅲ172瓦器)

S K 9出土遺物 (Ⅲ152~Ⅲ156) Ⅲ152~Ⅲ154は土師器皿。Ⅲ152・Ⅲ153はD₃類。Ⅲ153は灰白色を呈し、口縁端部に煤が厚く付着する。Ⅲ154はF₂類。Ⅲ155は白磁の碗。Ⅲ156は瓦器羽釜。体部はやや丸みを帯びる。

S D14出土遺物 (Ⅲ157~Ⅲ160) Ⅲ157はD₃類, Ⅲ158・Ⅲ159はD₅類, Ⅲ160はC₅類の土師器皿。

S D10出土遺物 (Ⅲ161・Ⅲ162) Ⅲ161はD₂類, Ⅲ162はD₅類の土師器皿。

S D12出土遺物 (Ⅲ163~Ⅲ172) Ⅲ163・Ⅲ164は土師器皿。ともにD₃類。Ⅲ165は土師器受皿。灰白色を呈する。Ⅲ166は青磁皿。Ⅲ167~Ⅲ169は白磁。Ⅲ167は口縁部が外折し、見込みに櫛描文をもつ。Ⅲ169は口縁部が端反で口禿げとする。Ⅲ170~Ⅲ172は瓦器鍋。いずれも口縁部は2段に屈曲する。口径は、Ⅲ170が20.0cm, Ⅲ171が21.2cm, Ⅲ172が27.2cm。

S D13出土遺物 (Ⅲ173~Ⅲ196) Ⅲ173~Ⅲ186は橙褐色の土師器皿。口径8~9cm

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

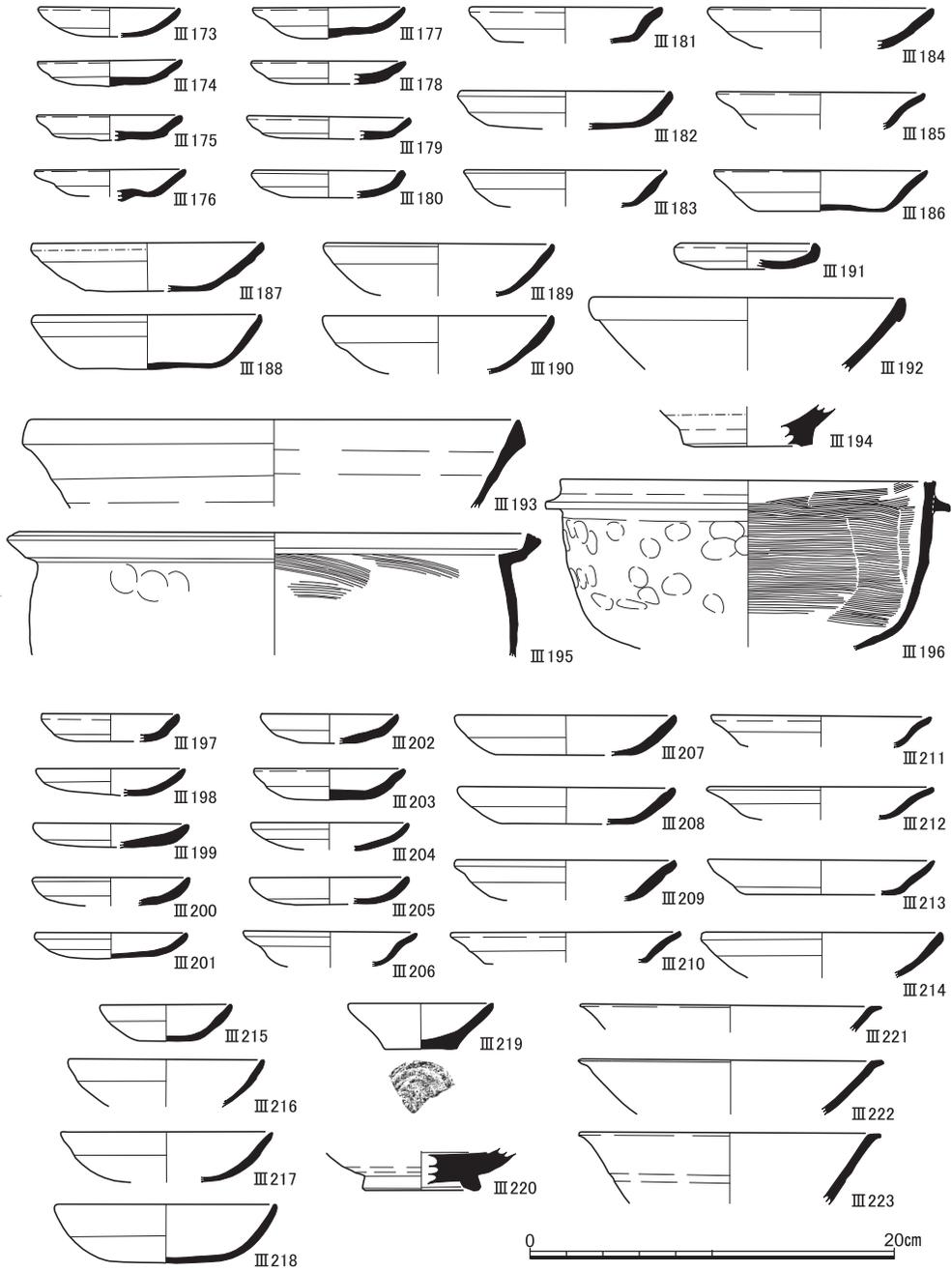


図41 S D13出土遺物 (Ⅲ173～Ⅲ191土師器, Ⅲ192・Ⅲ193白磁, Ⅲ194須恵器, Ⅲ195・Ⅲ196瓦器), S D13上層出土遺物(1) (Ⅲ197～Ⅲ218土師器, Ⅲ219陶器, Ⅲ220～Ⅲ223磁器)

東調査区の発掘成果

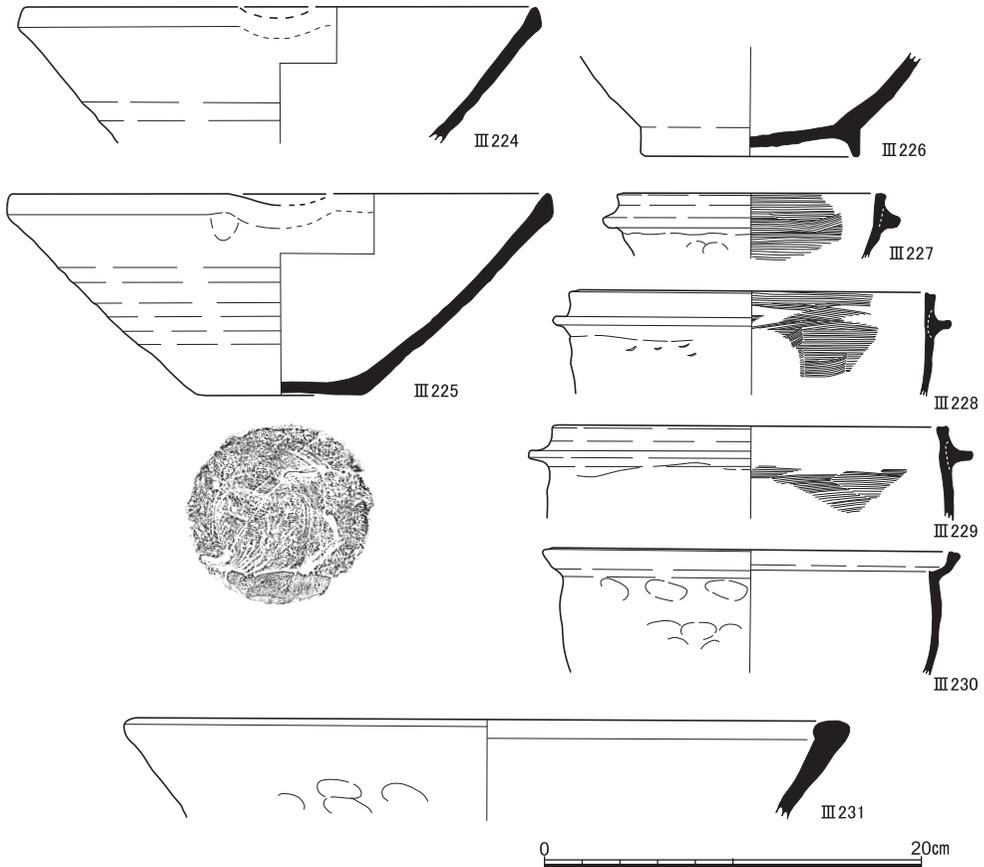


図42 S D13上層出土遺物(2) (Ⅲ224・Ⅲ225須恵器, Ⅲ226陶器, Ⅲ227～Ⅲ231瓦器)

のⅢ173～Ⅲ180と11～12cm前後のⅢ181～Ⅲ186にわかれる。Ⅲ173・Ⅲ174・Ⅲ177はD₃類, Ⅲ175・Ⅲ176・Ⅲ181・Ⅲ185・Ⅲ186はE₃類, Ⅲ178～Ⅲ180・Ⅲ183・Ⅲ184はE₁類, Ⅲ182はD₅類。Ⅲ184は口縁部外側に煤が付着する。

Ⅲ187～Ⅲ190は灰白色の土師器碗。口径13cm前後, 器高3cm前後をはかる。Ⅲ191は灰白色の土師器受皿。Ⅲ192・Ⅲ193は白磁碗。Ⅲ192は口縁部を玉縁とする。Ⅲ194は須恵器すり鉢。焼成が軟質で, 灰褐色を呈する。口径27.2cmをはかる。Ⅲ195は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲する。Ⅲ196は瓦器羽釜。体部はやや丸みを帯びる。

S D13上層出土遺物 (Ⅲ197～Ⅲ231) S D13を検出する過程で出土した遺物。Ⅲ197～Ⅲ214は橙褐色の土師器皿。口径8～9cmでD₃類が主体を占めるⅢ197～Ⅲ206と12～13cmでE₃類が主体となるⅢ207～Ⅲ214にわかれる。Ⅲ215～Ⅲ218は灰白色の土師器碗。



図43 黒褐色土・近世遺構出土遺物（Ⅲ232縄文土器，Ⅲ233土製人形，Ⅲ234～Ⅲ240泥面子，Ⅲ241青銅製品，Ⅲ242銭貨） 縮尺1/2

Ⅲ219は灰釉系陶器小椀。内面にのみ釉がかかる。Ⅲ220は青磁椀の底部。Ⅲ221～Ⅲ223は白磁椀。いずれも口径16.5cm前後で，口縁部が外折する。

Ⅲ224・Ⅲ225は須恵器すり鉢。Ⅲ225は底部に糸切り痕跡がみられる。Ⅲ226は陶器鉢。見込みに自然釉がかかる。Ⅲ227～Ⅲ229は瓦器羽釜。口径は，Ⅲ227が13.2cm，Ⅲ228が18.4cm，Ⅲ229が19.6cmである。Ⅲ230は瓦器鍋。2段に屈曲するが，立ち上がりはややあまい。口径20.8cmをはかる。Ⅲ231は瓦器盤。口径37.2cm。

以上解説した中世の出土遺物は，S K 9出土の土師器ⅢF₂類のように，15世紀に下るものもあるが，おおむね13世紀の遺物からなると判断する。

縄文土器（Ⅲ232） 近世の遺構から出土した。体部上半の部位とみられ，上端が外側へ屈曲して口頸部へと続くとみられる。屈曲部の下位に，横走る爪形文を2列配し，その下位には縦走縄文が施文されている。中期初頭の鷹島式ないし船元Ⅰ式に比定できる。

近世の遺物（Ⅲ233～Ⅲ242） 第2層の黒褐色土および近世遺構埋土から，近世後半を中心とした陶磁器・土師器・土製品・金属製品・貨幣などが出土している。

Ⅲ233は土製人形。高さ4.2cmの小型品。前後の型を合わせて製作しており，離型材が付着する。底面中央から上部に向かって，長さ1.3cm，直径3mmの孔があいている。Ⅲ234～240は泥面子。Ⅲ241は青銅製の鉾。Ⅲ242は銭貨。「寛永通宝」である。

3 北調査区の発掘成果

(1) 層位 (図44)

調査区西壁と北壁の層位を図44に掲げる。基本的な堆積は上から順に、表土・攪乱 (第1層)、黒褐色土 (第2層)、茶褐色土 (第3層)、黄白色粗砂 (第4層)、灰褐色土 (第5層)、砂礫 (第6層) となる。

第2層の黒褐色土は、層厚20~30cmの畑作土で近世後半の遺物を包含する。第3層の茶褐色土は中世の遺物を包含する。第4層の黄白色粗砂は、調査区西辺のみ分布していた。第5層の灰褐色土は第6層の上面が土壌化した堆積物とみられるが、調査区西半は土壌化が進行せず、細砂~シルト質の堆積物からなる。遺物を含まない。第6層の砂礫は、赤褐色~黄白色を呈する。

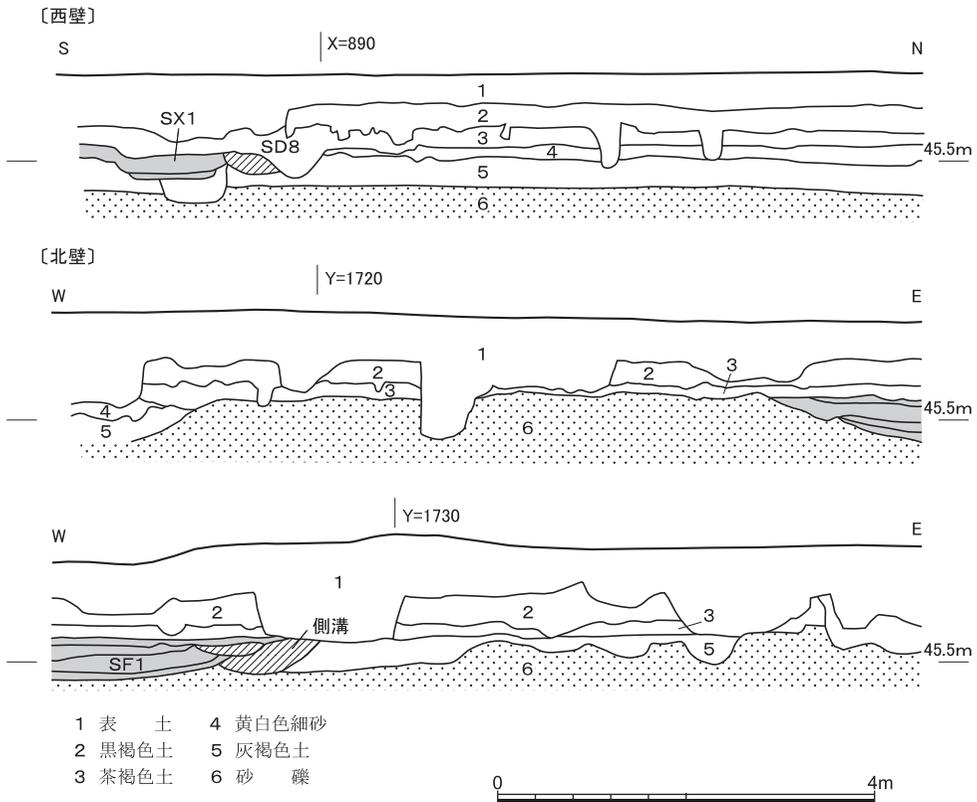


図44 北調査区西壁・北壁の層位 縮尺1/80

(2) 検出遺構 (図版8～10, 図45)

第4層および第5層の上面で中世の遺構, 第3層の上面で近世の遺構を検出した。

中世の遺構 道路, 溝, 土坑などがある。S F 1, S X 1は道路状遺構。S F 1は北東から南西へはしり, X = 890付近で西へと方向を変えているが, 方向を変えた部分は道路S X 1に切られて大部分を失っている。北端は調査区外へと続いている。道路幅は, 北端で幅3m, 最も広い部分で5.5m前後である。構築当初, 50cm前後, U字形に掘りくぼめて, 拳大～小児頭大の礫を混じえた砂質土をつき固めて路盤としている。調査区北壁断面では, 東側に側溝状の落ち込みがみられたが, 面的に検出することはできなかった。また北壁断面で, 3枚の路盤の重なりが観察できた。

S X 1は, S F 1の東10m前後の間隔を開けてほぼ並行してはしり, X = 887付近で西へと方向を変え, やや蛇行しながら西へとはしり調査区外へと伸びている。近世の遺物包含層である黒褐色土を除去した段階で上面が露出していた。南北に伸びる部分で, 道路幅4mをはかる。西へ伸びる部分は, 南端が攪乱で失われており確定できないが, 調査区南辺には及ばないので, やや狭く3m前後ではなかったかと推定する。西へ伸びる部分では, 北端に側溝(S D 8)が認められた。S F 1同様, 40cm前後掘りくぼめて, 礫混じりの砂質土をつき固めて路盤としている。路盤は3枚確認でき, 上層の路盤では, 礫とともに, 瓦や陶器類を多量に混ぜて路盤としていた(図版9-2・3)。

出土遺物から判断して, S F 1は13世紀～14世紀前半, S X 1は14世紀後半以降であり, 調査区西寄りをはしるS F 1を東側のS X 1に付け替えたと考えてよい。

S D 3・S D 5・S D 6・S D 9は南北方向, S D 7は東西方向に伸びる溝である。

土坑は, 調査区北辺でS K 1を検出したほか, 調査区東辺でS K 2～S K 6・S E 5を検出した。後者は, 直径1.2～2m前後の円形を呈するものが多い。道路S X 1に東側に並ぶことから, 野壺の可能性が高いと判断している。

近世の遺構 野壺, 小溝, 柱穴などがある。S E 1～S E 4は野壺である。S E 1～S E 3は漆喰製で, S E 2・S E 3は底面の一部のみが残存していた。S E 4は木桶を設置した野壺とみられる。S D 1は北東-南西方向に伸びる石組の水路。石組の礫の一部には, 墓石(Ⅲ403・Ⅲ404)が転用されていた(図版10-6)。検出長2.5m, 幅0.2mで, 下底面は両端が高く, 中央部に水が集まるように作られている。水溜状の施設かもしれない。

柱穴は, 一辺が20～30cmの方形掘形で, 調査区西半を中心に多数分布する。2.4～2.8m前後の間隔で東西方向に並ぶ。耕作にともなう柵列であろう。

北調査区の発掘成果

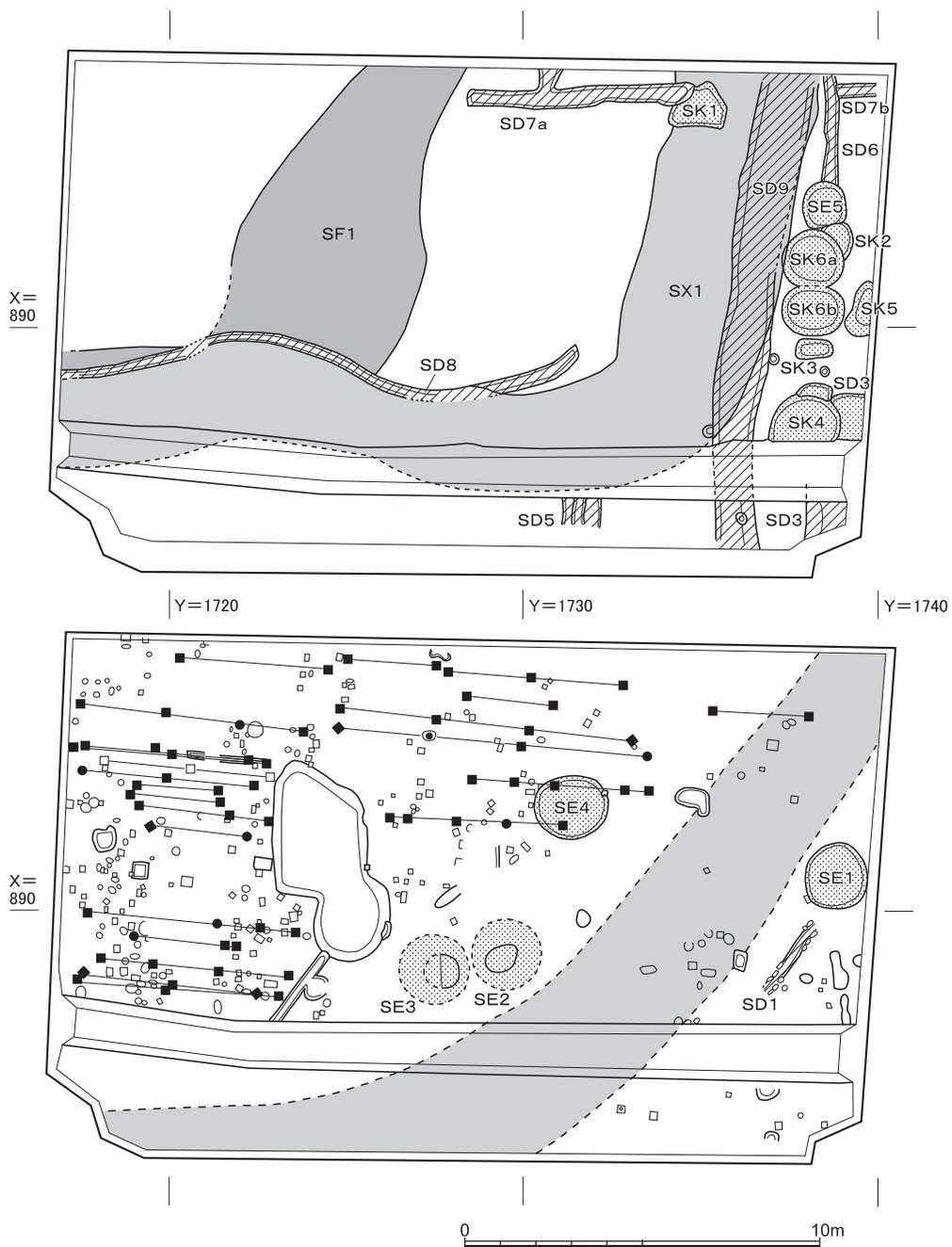


図45 北調査区検出の遺構 縮尺1/200

(3) 出土遺物 (図版11, 図46~55)

S D 7 出土遺物 (Ⅲ243~Ⅲ281) Ⅲ243~Ⅲ275は土師器皿。Ⅲ249・Ⅲ268・Ⅲ270が灰白色で、ほかは橙褐色を呈する。口径9~10cm前後のⅢ243~Ⅲ262, 14~15cm前後のⅢ263~Ⅲ275がある。2段撫で手法C₃類が主体を占める。

Ⅲ276は、灰白色を呈する回転台成形の土師器皿。底部に回転糸切り痕を残す。Ⅲ277は須恵器すり鉢。Ⅲ278は灰釉系陶器で、口径12cm前後の皿。Ⅲ279は陶器と判断するが、焼成が軟質で劣化が著しい。Ⅲ280・Ⅲ281は口縁部を玉縁状とする白磁碗。

S D 9 出土遺物 (Ⅲ282~Ⅲ294) Ⅲ282~Ⅲ289は土師器皿。Ⅲ286の「て」字状口縁手法B₂類のような古い遺物もみられるが、土師器皿の主体はD₃・₄類である。Ⅲ285は口縁端部に煤が付着する。Ⅲ290は須恵器蓋。古代の遺物の混入であろう。Ⅲ291は須恵器すり鉢。Ⅲ292は灰釉系陶器碗の底部。Ⅲ293は白磁碗の底部。Ⅲ294は青磁碗の底部。見込みに、櫛描と篋描による文様を施す。

S K 1 出土遺物 (Ⅲ295~Ⅲ308) Ⅲ295~Ⅲ307は土師器皿。口径9~10cmのⅢ295~Ⅲ303と13~15cmのⅢ304~Ⅲ307があり、C₃類, D₄類からなる。Ⅲ304は灰白色で、ほかは橙褐色。Ⅲ308は須恵器すり鉢。口径27.2cmをはかり、口縁部は三角状に肥厚する。

S D 6 出土遺物 (Ⅲ309・Ⅲ310) Ⅲ309は灰白色を呈する土師器皿。D₄類。Ⅲ310は白磁碗の底部。

S F 1 出土遺物 (Ⅲ311~Ⅲ323) Ⅲ311~Ⅲ316は土師器皿。Ⅲ311は灰白色で口径8.8cm。D₄類。Ⅲ312は口径9.2cmのD₄類, Ⅲ313は10.8cmのD₃類。Ⅲ314・Ⅲ315はともに口径14.5cmで、C₃類。Ⅲ316は口径16.5cmをはかる。C₃類。

Ⅲ317は古瀬戸のおろし皿。Ⅲ318は瓦質土器。内面を丁寧に撫でて仕上げ、口縁端部に面取りを施している。Ⅲ319は備前すり鉢。口縁外側端部が縁帯状に肥厚する。Ⅲ320は瓦器火鉢。内面に煤が付着する。Ⅲ321~Ⅲ323は白磁。Ⅲ321は口縁部が小玉縁となる碗。Ⅲ322・Ⅲ323は碗の底部。

S X 1 最下層出土遺物 (Ⅲ324~Ⅲ328) Ⅲ324・Ⅲ325は土師器碗。Ⅲ324は橙褐色を呈し口径9cmをはかる小碗である。Ⅲ325は灰白色で口径13.5cm。Ⅲ326・Ⅲ327は瓦器羽釜。Ⅲ328は同安窯系青磁碗。見込みおよび内側側面に片切彫りによる文様を施す。

S X 1 出土遺物 (Ⅲ329~Ⅲ362・Ⅲ364~Ⅲ369) Ⅲ329~Ⅲ339は土師器皿。D₄類(Ⅲ332), D₃類(Ⅲ329~Ⅲ331・Ⅲ335)とともに、F₁類(Ⅲ334・Ⅲ337), F₂類(Ⅲ333・Ⅲ336・Ⅲ338・Ⅲ339)がみられる。Ⅲ340は須恵器すり鉢の底部。Ⅲ341・Ⅲ348は

北調査区の発掘成果

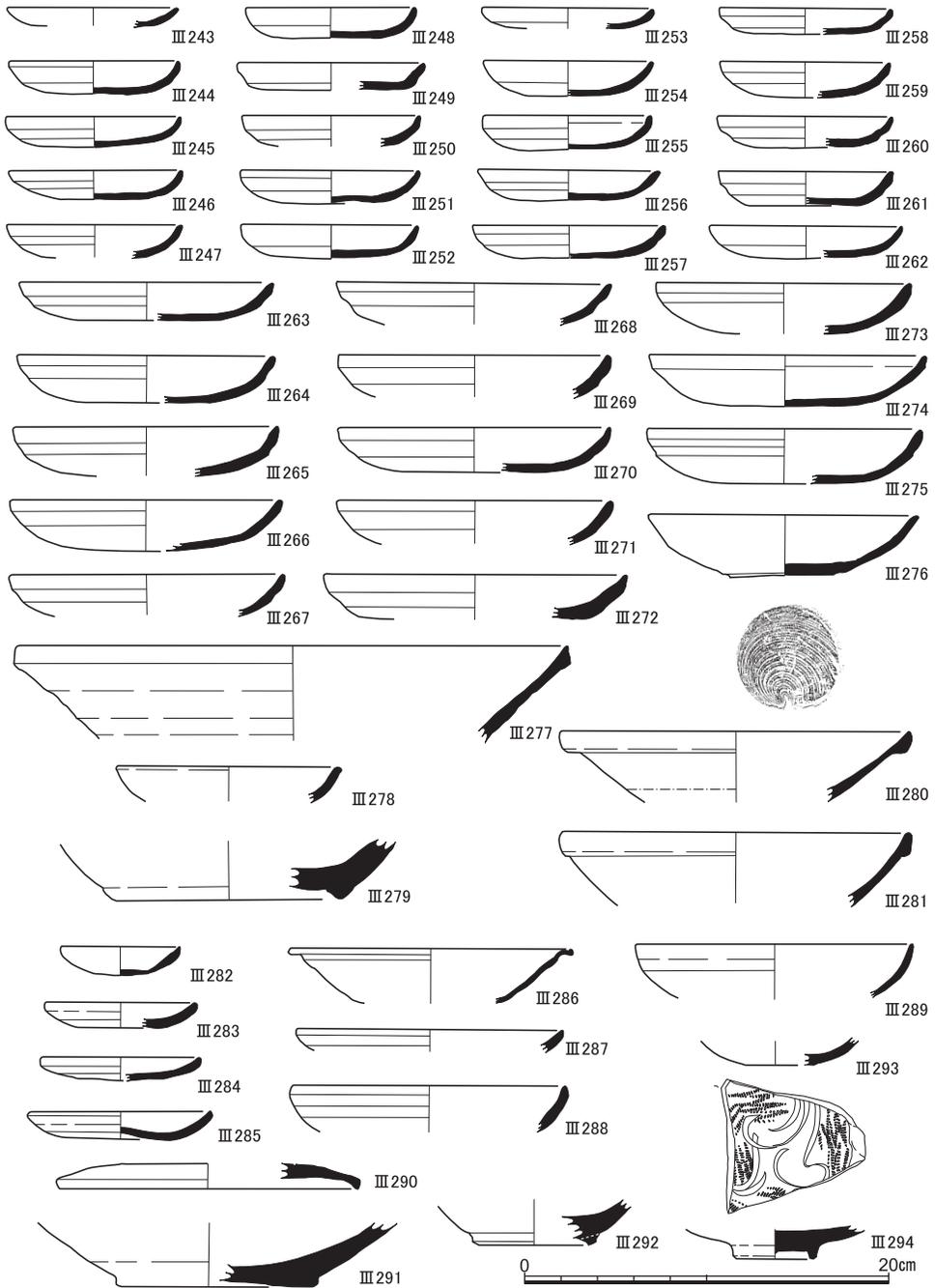


図46 S D 7 出土遺物 (Ⅲ243～Ⅲ276土師器, Ⅲ277須恵器, Ⅲ278・Ⅲ279陶器, Ⅲ280・Ⅲ281白磁), S D 9 出土遺物 (Ⅲ282～Ⅲ289土師器, Ⅲ290・Ⅲ291須恵器, Ⅲ292陶器, Ⅲ293白磁, Ⅲ294青磁)

京都大学病院構内A F14区の発掘調査

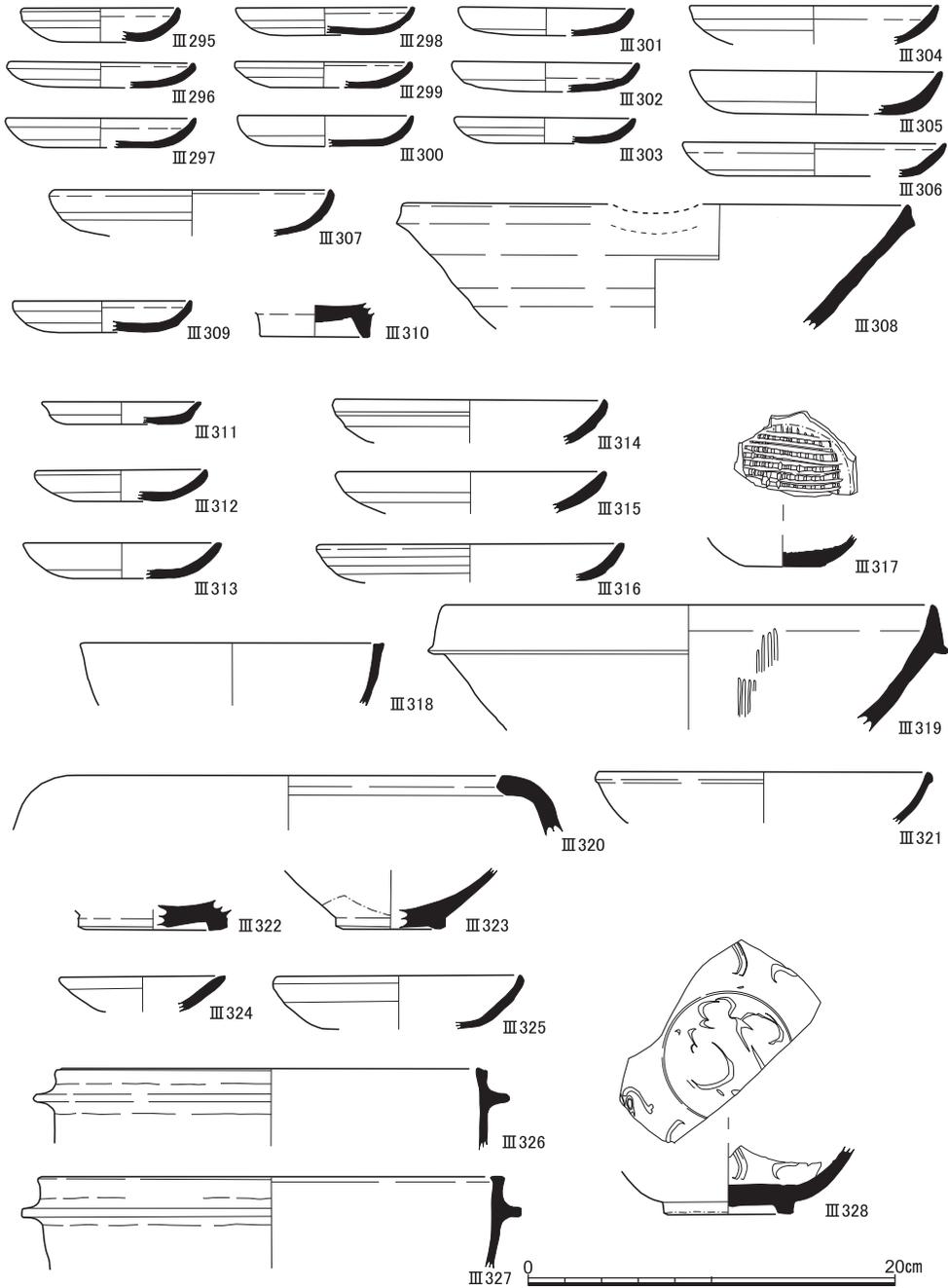


図47 S K 1 出土遺物 (Ⅲ295～Ⅲ307土師器, Ⅲ308須恵器) S D 6 出土遺物 (Ⅲ309土師器, Ⅲ310白磁) S F 1 出土遺物 (Ⅲ311～Ⅲ316土師器, Ⅲ317・Ⅲ319陶器, Ⅲ318・Ⅲ320瓦器, Ⅲ321～Ⅲ323白磁), S X 1 最下層出土遺物 (Ⅲ324・Ⅲ325土師器, Ⅲ326・Ⅲ327瓦器, Ⅲ328青磁)

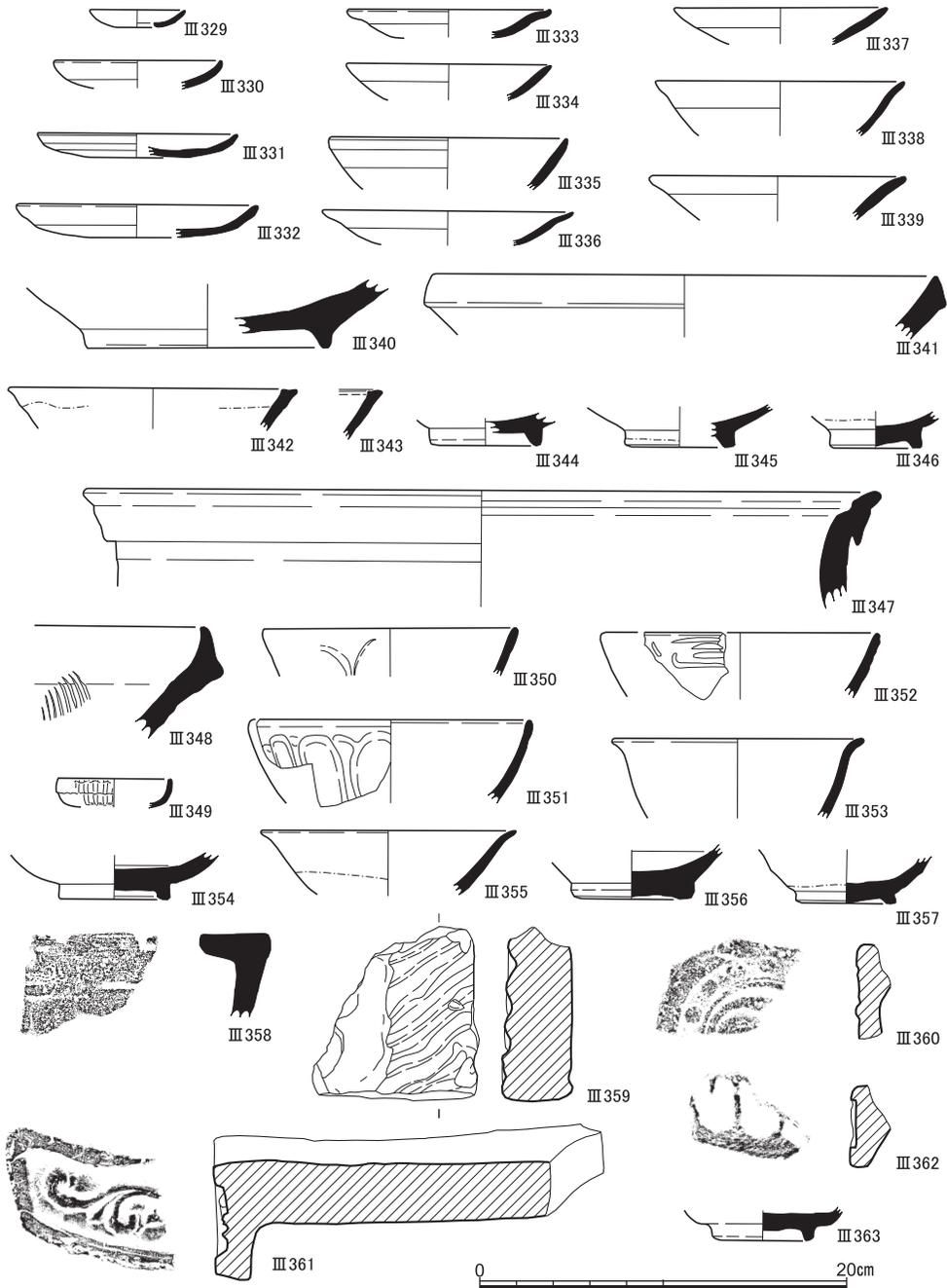


圖48 S X 1 出土遺物 (III 329~III 339土師器, III 340須惠器, III 341~III 343・III 346~III 348陶器, III 344・III 345・III 355~III 357白磁, III 350~III 354青磁, III 358・III 359瓦器, III 360軒丸瓦, III 361・III 362軒平瓦), S D 8 出土遺物 (III 363青磁)

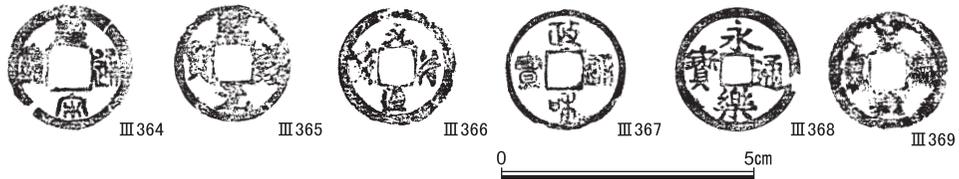


図49 S X 1 出土遺物 (Ⅲ364～Ⅲ369銭貨) 縮尺2/3

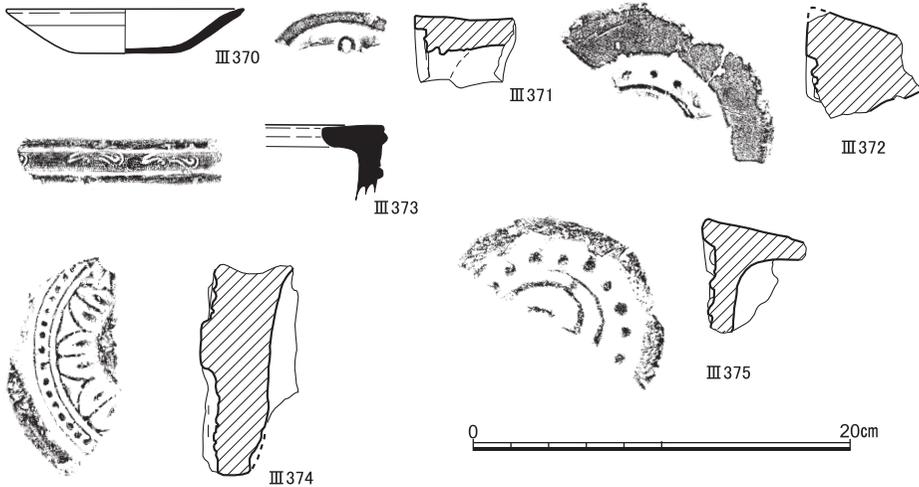


図50 S D 3 出土遺物 (Ⅲ370土師器), S K 6 出土遺物 (Ⅲ371・Ⅲ372軒丸瓦), 茶褐色土出土遺物 (Ⅲ373瓦器, Ⅲ374・Ⅲ375軒丸瓦)

備前すり鉢の口縁部。Ⅲ341は還元焼成で、口縁部がわずかに上下に拡張している。Ⅲ348は口縁部が上方へ拡張し、内面にすり目が認められる。Ⅲ342・Ⅲ343は古瀬戸の口縁部。口縁端部が内側へ肥厚している。Ⅲ344・Ⅲ345は白磁の底部。Ⅲ346は古瀬戸系の天目碗。Ⅲ347は、常滑の甕。口縁部が縁帯状に肥厚している。

Ⅲ349は青白磁合子の蓋。Ⅲ350～Ⅲ354は青磁碗。Ⅲ350・Ⅲ351は外面に蓮弁文、Ⅲ352は雷文をもつ。Ⅲ353は無文で、口縁部が外反する。Ⅲ355～Ⅲ357は白磁碗。Ⅲ355は口縁部が外反する。Ⅲ358は箱形を呈する瓦器火鉢。劣化が著しいが、口縁部外面に唐草文がみられる。Ⅲ359は瓦質の製品で、方形ないし長方形になるとみられる。厚さ3～4cm、片面に、辺に対して斜めの凹凸がつけられている。Ⅲ360は軒丸瓦。Ⅲ361は唐草文をもつ軒平瓦。Ⅲ362は剣頭文をもつ軒平瓦。

Ⅲ364～Ⅲ369は渡来銭。Ⅲ364は「皇宋通宝」(初鑄年1038)、Ⅲ365は「熙寧元宝」(初鑄年1068)、Ⅲ366は「元符通宝」(初鑄年1098)、Ⅲ367は「政和通宝」(初鑄年1111)、Ⅲ368は「永樂通宝」(初鑄年1408)、Ⅲ369は判読不能である。

北調査区の発掘成果

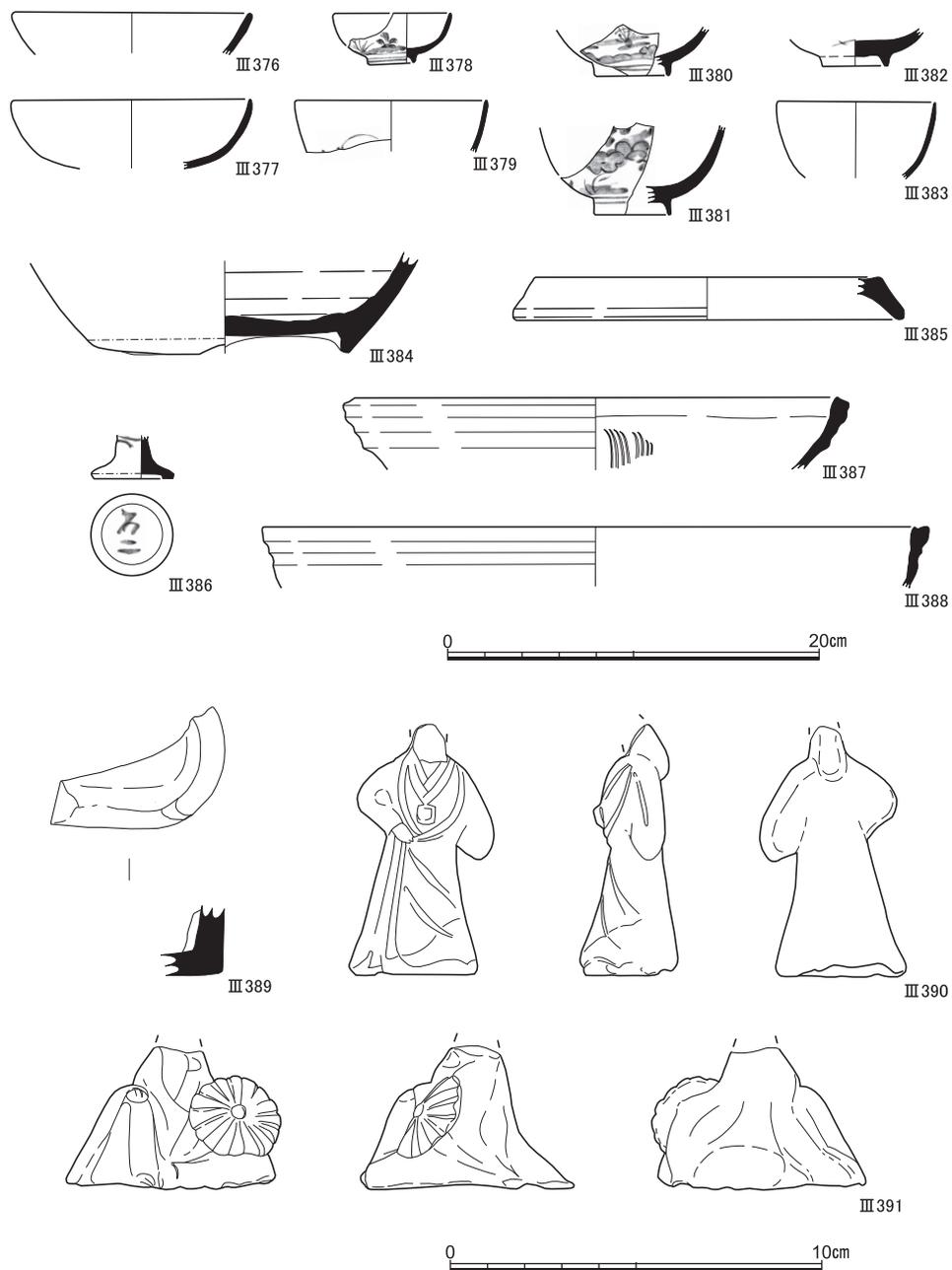


図51 S E 4 出土遺物 (III 376・III 377・III 384・III 387・III 388陶器, III 378～III 383・III 386磁器, III 385土師器, III 389軟質施釉陶器, III 390・III 391土製人形)

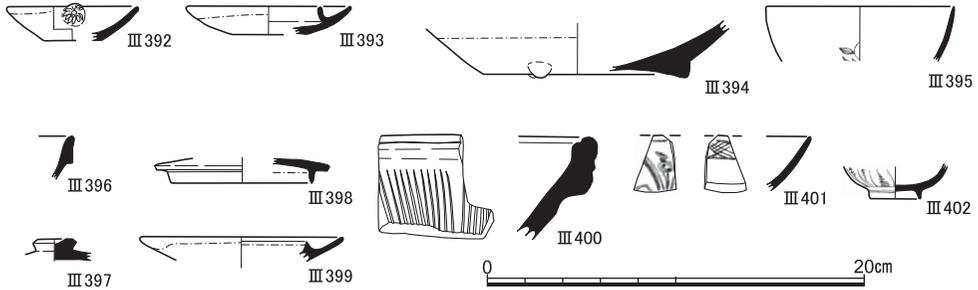


図52 S D 1 出土遺物 (Ⅲ392～Ⅲ394陶器, Ⅲ395磁器), S E 1 出土遺物 (Ⅲ396土師器, Ⅲ397～Ⅲ400陶器, Ⅲ401・Ⅲ402磁器)

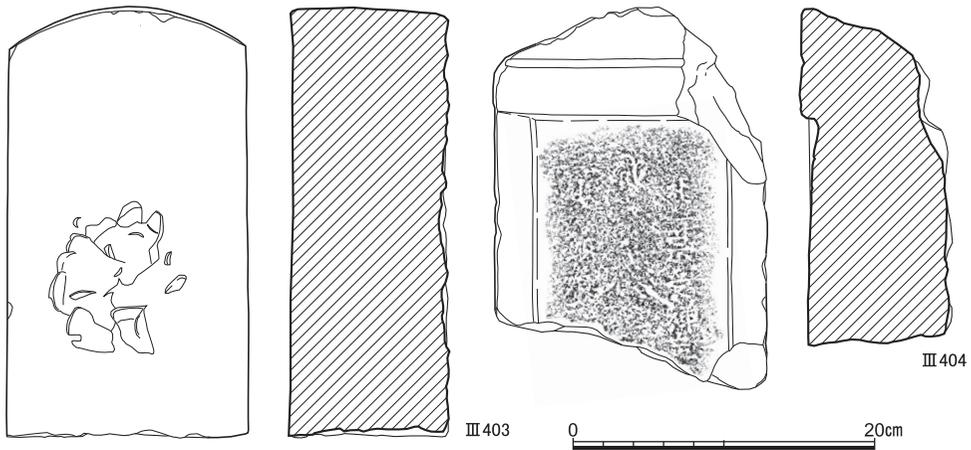


図53 S D 1 出土遺物(2) (Ⅲ403・Ⅲ404墓石) 縮尺1/5

S D 8 出土遺物 (Ⅲ363) 青磁碗の底部。見込みの釉を掻き取っている。

S D 3 出土遺物 (Ⅲ370) 土師器皿F 4類。口径12.4cmをはかる。

S K 6 出土遺物 (Ⅲ371・Ⅲ372) Ⅲ371は小型の軒丸瓦。Ⅲ372は巴文軒丸瓦。外側に珠文をもつ。

中世遺構の多くは、12世紀後半から13世紀の中世前半期に年代比定できる。中世後半期に属するのは、S D 3と長期の利用が想定されるS X 1である。

茶褐色土出土遺物 (Ⅲ373～Ⅲ375) 茶褐色土からは、土師器・陶磁器・瓦器・瓦・金属製品などが出土している。ここには、瓦器と軒丸瓦のみ掲げて、解説を加えておく。Ⅲ373は箱形を呈する瓦器火鉢。Ⅲ374は、複弁の蓮華文軒丸瓦。外区に珠文帯をもつ。Ⅲ375は巴文軒丸瓦。左回りの巴文で、外側に珠文帯をもつ。

北調査区の発掘成果

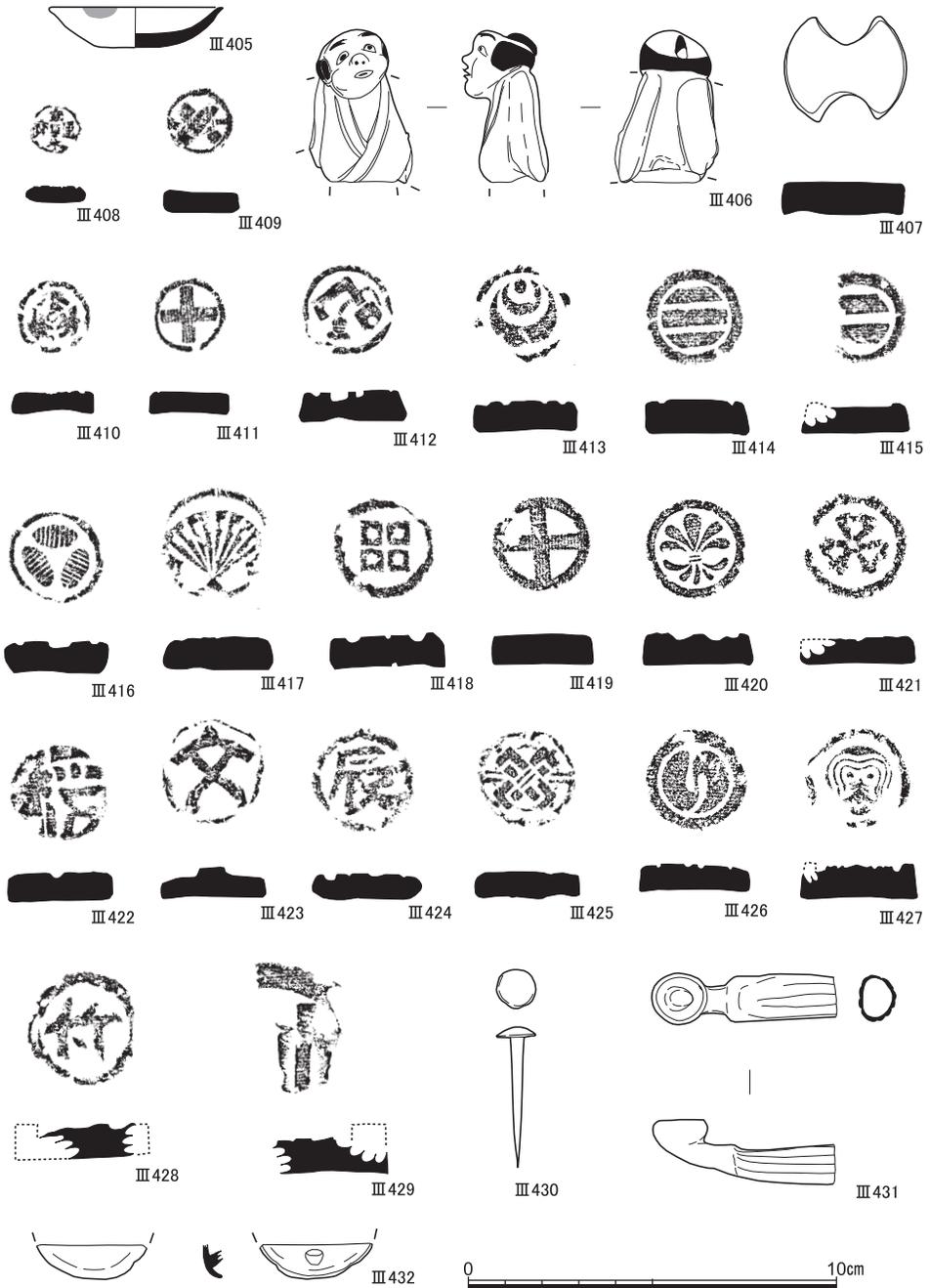


図54 黒褐色土出土遺物（Ⅲ405土師器，Ⅲ406土製人形，Ⅲ407土製品，Ⅲ408～Ⅲ429泥面子，Ⅲ430～Ⅲ432青銅製品） 縮尺1/2

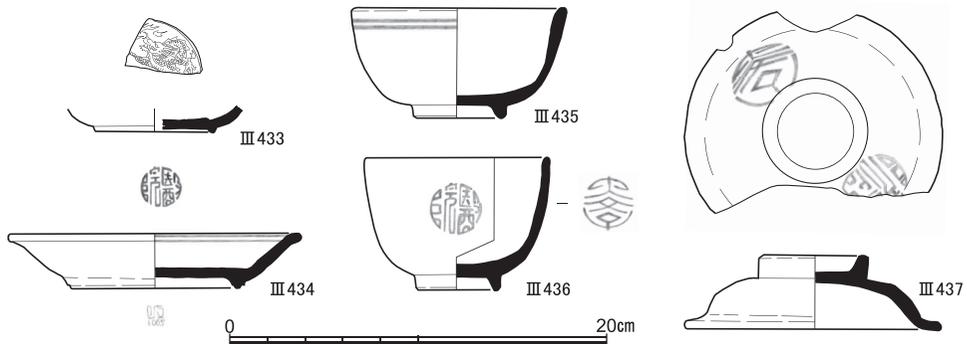


図55 表土・攪乱出土遺物（Ⅲ433陶器，Ⅲ434～Ⅲ437磁器）

S E 4 出土遺物（Ⅲ376～Ⅲ391） Ⅲ376・Ⅲ377は陶器碗。Ⅲ378～Ⅲ383は磁器染付。Ⅲ378は小杯。Ⅲ379～Ⅲ382は染付碗。Ⅲ381はいわゆる、くらわんか碗である。Ⅲ381・Ⅲ382は、見込みを蛇の目釉はぎとしている。Ⅲ383は白磁の碗。

Ⅲ384は陶器鉢。高台は数カ所切り込みをもつ。底部と内面を除いて、透明釉を施している。Ⅲ385は土師器蓋。Ⅲ386は磁器染付。仏飯の脚部。底面に「ろ二？」と読める墨書がある。Ⅲ387・Ⅲ388は信楽の陶器すり鉢。Ⅲ389は軟質施釉陶器の鬢水入れ。灰白色を呈する胎土に、内外面全体に透明釉を施している。Ⅲ390・Ⅲ391は伏見人形。

S D 1 出土遺物（Ⅲ392～Ⅲ395・Ⅲ403・Ⅲ404） Ⅲ392は陶器灯明皿。Ⅲ393は陶器灯明受皿。Ⅲ394は土瓶の底部。Ⅲ395は磁器染付。Ⅲ403・Ⅲ404はS D 1 肩部に、磔の代わりに置かれていた墓石。Ⅲ403は、かまぼこ形で表裏ともに銘をもたない。未使用の墓石の転用であろうか。Ⅲ404は前面を掘りくぼめる。3列銘を刻んでいるが、磨滅が著しいため、中央最上部の梵字と右列の「受尼」と読める文字以外は、判読しがたい。

S E 1 出土遺物（Ⅲ396～Ⅲ402） Ⅲ396は土師器炮烙。Ⅲ397・Ⅲ398は陶器蓋。Ⅲ399は陶器灯明受皿。Ⅲ400は陶器すり鉢。Ⅲ401・Ⅲ402は磁器染付碗。

黒褐色土出土遺物（Ⅲ405～Ⅲ432） 黒褐色土からは、土師器・陶磁器・土製品・瓦・金属製品などが出土した。Ⅲ405は土師器小皿。型押し成形で、内外面に離型材が付着する。口縁端部に煤が付着する。Ⅲ406は伏見人形。Ⅲ408～Ⅲ429は泥面子。Ⅲ430～Ⅲ432は青銅製品で、Ⅲ430は鉢、Ⅲ431は煙管、Ⅲ432は釘隠。

表土・攪乱出土遺物（Ⅲ433～Ⅲ437） Ⅲ433は陶器緑釉皿。見込みに、型押しによる龍文を描く珉平焼である。Ⅲ433～Ⅲ437は大学病院のマークをもつ食器類である。

4 西調査区の発掘成果

(1) 層位 (図56)

調査区西壁の層位を図56に掲げる。堆積は上から順に、表土(第1層)、黒褐色土(第2層)、礫混じり灰褐色土(第3層)、赤褐色～黄白色の砂礫(第4層)となる。東調査区、北調査区で認められた中世の遺物包含層である茶褐色土の堆積がみられない。

第2層の黒褐色土は畑作土で、近世後半の遺物を包含していた。第3層の灰褐色土は、中世の遺物が出土しているが、ほとんどが小片で磨滅しているものも多かった。

(2) 遺構と遺物 (図版8, 図57・58)

第3層上面で、一辺20～30cm前後の方形柱穴を多数検出した。調査面積が狭小なため、並びなどを確認することはできなかったが、耕作に伴う柵列を構成する小穴であろう。

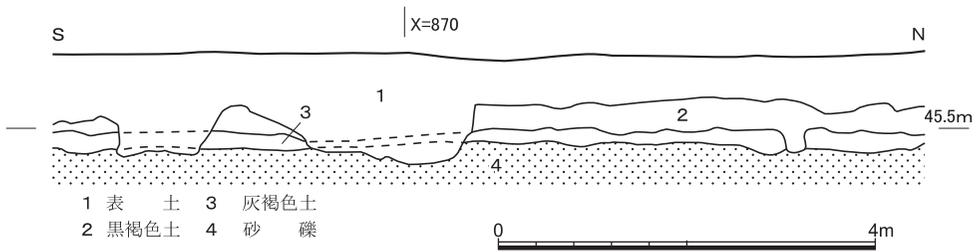


図56 西調査区の層位 縮尺1/80

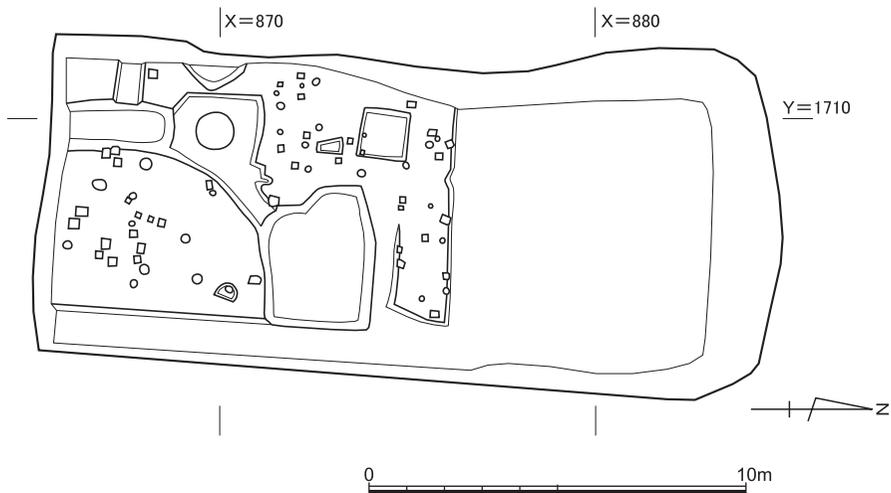


図57 西調査区検出の遺構 縮尺1/200

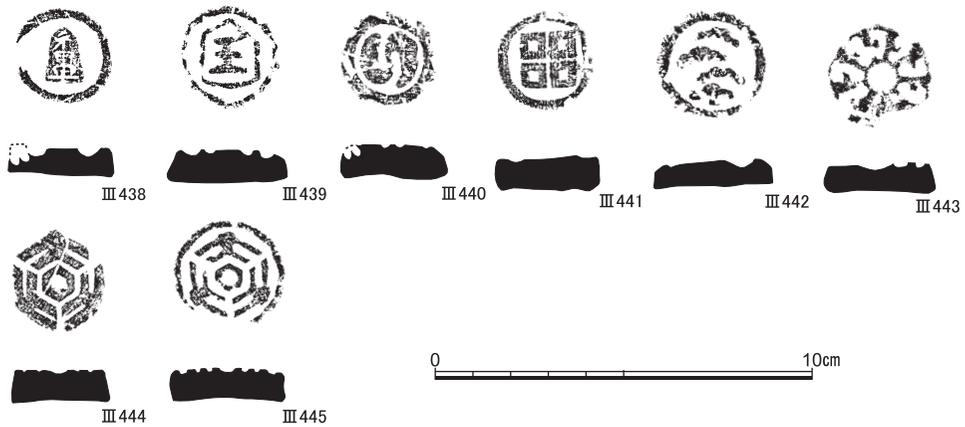


図58 黒褐色土出土遺物（Ⅲ438～Ⅲ445土製品） 縮尺1/2

出土遺物から判断して、近世後半のものである。

第2層の黒褐色土からは、近世後半の陶磁器・土師器・土製品・瓦類・金属製品などが出土した。Ⅲ438～Ⅲ445は、泥面子である。

5 小 結

今回の調査地点は、3ヶ所に分かれていたが、それぞれの調査区における土地利用の歴史は少しずつ異なっていた。

古代以前は、いずれの調査区も高野川系流路の影響下にあり、人間の活動地点からは、はずれていた。中世段階では、東区を含む一帯が人間活動の中心地となり、南区付近は依然として高野川系流路の影響下にある不安定な土地であった。北調査区付近は、北東方向から南西方向へと道路が伸びており、土地境界をなしていた。この道路ないしは土地境界は近世まで残存していたことが遺構分布から推定された。そして、近世にいたると、調査区一帯は畑作地として利用されたことが明らかとなった。

このような土地利用の変遷は、隣接する19・39地点〔京大埋文研1981a〕および122地点〔浜崎1984〕の調査成果を支持する結果といえるが、北区で土地境界となる道路を検出したことにより、中世の活動の中心地の北側への広がりを絞り込むことができる点で、重要な成果となった。

発掘調査と資料整理は、千葉豊が担当し、発掘と整理を通じて、磯谷敦子・曾根茂・長尾玲・西田絢・深町知美が測量・実測などの作業にあたった。